

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Problemas encontrados al traducir Uji syūi monogatari al español

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寶野, 雄介, Hono, Yusuke メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1832">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1832</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 『宇治拾遺物語』 翻訳の諸問題

寶 野 雄 介

### 1. はじめに

13世紀に上梓された古典文学作品『宇治拾遺物語』のスペイン語への翻訳を進める際に直面した問題を示し、解決案を探ってゆく。

本稿の筆者は日本語を母語とし、また長年にわたるスペイン語の学習経験を欠くため、翻訳の読者に想定しているスペイン語圏の人々とのあいだには文体や語彙選択の巧拙という点で容易に埋めがたい懸隔がある。日本語から直接スペイン語へ翻訳したのではつたない文章ができあがることは想像に難くない。したがって、日本国内の複数の出版社によって刊行された日本語の『宇治拾遺物語』ではなく、Millsによる英訳 *A collection of tales from Uji*<sup>1</sup> を底本とする。

底本に据える書が頻繁に手落ちを呈するようでは翻訳の質に疑いが生ずる。当英訳が底本とするにふさわしい訳書であるか、その特長を示すため数例を挙げ簡単に説明せねばならない。

Mills 訳は、各話に付した脚注がつまびらかであるだけでない。『宇治拾遺物語』以外の説話集（『今昔物語集』、『古本説話集』等）をも視野に入れつつ、成立の時代背景および物語文学・説話文学の進展の歴史へ微に入り細にわたる解説をほどこしている<sup>2</sup>。Mills が底本とした『日本古典文学大系 宇治拾遺物語<sup>3</sup>』に記載された、校注者による解釈を取り入れ、とりわけ『今昔物語集』に収録された類話との比較を通し、『宇治拾遺物語』の性質を明らかにせんと試みている。

本文の訳語に注目していこう。『宇治拾遺物語』には4種の冒頭語（今は昔・これも今は昔・昔・これも昔）が存在する。英訳は原文の語に倣い、「今は昔」で始まる物語には *Long ago*、「これも今は昔」で始まるものには *Again, long ago* という文句で書き出している。些細な点に注意が行き届いている様子は、訳者のこういった気配りをもって察することも可能であるが、さらに例を挙げることにする。以下、括弧内の記述と下線は本稿筆者が便宜上付したものである。

1 Mills, 1970.

2 Mills, 1970: 1-131 を参照のこと。

3 渡辺 他, 1960。ただし、岩波書店によるシリーズ「日本古典文学大系」は絶版等の理由で現在入手困難である。本稿に示した『宇治拾遺物語』該当箇所引用は、同社刊行の『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語 古本説話集』（三木 他, 1990）を参照されたい。

夜部さけびしは、はやう、その辺にある下人のかぎりに、物いひ聞かすとて、人よびの岡とてあるつかのうへにていふなりけり。<sup>4</sup>

Now he realized that the shouting he had heard the night before had been an announcement to every peasant in the neighbourhood and had been made from a mound called Summoning Hill.<sup>5</sup>

はやく芋粥煮るなりけりと見るに、食ふべき心地もせず。かへりては、うとましく成にたり。<sup>6</sup>

Now it dawned on the Goi that they were going to make yam gruel, and he lost all his appetite for it—in fact, the idea of yam gruel suddenly became quite revolting to him.<sup>7</sup>

古語は現代語に比べ語彙が少ないものの、助動詞の使い分けにより、細かなニュアンスの表現を可能にしている。副詞等との組合せを含めるとさらに幅が広がることは言うまでもない。上に示したのは『宇治拾遺物語』第18話「利人、暑預粥の事」から採った2例だが、ここで示された「はやく（はやう）＋けり」は注意を要する箇所である。この副詞と助動詞の呼応関係は、「なんとこのような事情であったのだ」という意味であるが、語り手あるいは登場人物の驚きを表し、物語に臨場感をもたせる効果を有する。さらに「けり」は詠嘆の意で「それまで気付かずだったことに初めて気付いた気持ちを表わす用法<sup>8</sup>」である。realized や dawned 等の動詞はさることながら、とりわけ now の一語を用いることで「気付き」のニュアンスの訳出に成功していると言えよう。その他、Mills 訳には評価できる点が多い。

しかし、『源氏物語』や『今昔物語集』に比して分量が大幅に少ないとはいえ、『宇治拾遺物語』は長短交え200近くの説話を収録した大著である。英訳にひとつとして誤りが見られないわけではない。

「いづら、湯は」といへば、「まことは敦賀へみて奉るなり」といへば、「物ぐるほしう、おはしける。京にて、さとの給はましかば、下人なども

4 三木 他, 1990: 38.

5 Mills, 1970: 160.

6 三木 他, 1990: 38.

7 Mills, 1970: 160.

8 金田一 他, 1991: 351.

具すべかりけるを」といへば、利仁、あざ笑ひて、「利仁独（ひとり）侍らば、千人とおぼせ」と云。かくて、物など食て、急出（いそぎいで）ぬ。<sup>9</sup>

‘Where are we going to have our bath?’ asked the Goi, and Toshihito answered, ‘The fact is, I’m taking you to Tsuruga.’ ‘What a crazy thing to do!’ said the Goi. ‘If only you’d told me that in the capital, I’d have brought some men with me.’ But Toshihito merely smiled and said, ‘So long as I am here, you can feel as if you had a thousand men.’ They had a meal and then hurried on their way.<sup>10</sup>

先ほどと同じく「利人、暑預粥の事」を例に採ったが、訳文のように smiled（微笑んだ）とすると、「あざ笑ひて」で示された利仁の磊落ぶりが出ないであろう<sup>11</sup>。この場面で利仁の性格を正しく表現しなければ、捕らえた狐を使役する際に見せる自信、客人に大量の芋粥をふるまう豪快さ等に示される、その後の彼の人物像との一貫性が見出せなくなる。登場人物への印象が、日本語の原文を読むときと変わらないよう、いかなる動詞をあてるかよくよく考えなければならぬ。

こういった不備が幾分か見受けられるものの、翻訳作品全体を見渡せば、訳者がとりわけ日本の文化・風習にまつわる用語の訳とその解説にさまざまな工夫を凝らし対処したことは明らかである。Mills 訳をスペイン語訳の底本とすることの正当性に疑いを差しはさむ余地はないだろう。

翻訳を進めるにあたり、Mills 訳を底本に据えつつ、日本で出版された『宇治拾遺物語』の注釈等を随時参照し、訳に修正を加えながら取り組むこととする。

## 2. 全文訳の必要性および注釈の取捨選択

『宇治拾遺物語』は、Mills 訳の英語と Sieffert 訳<sup>12</sup> のフランス語で全文訳がなされた。作品を古語にせよ現代語訳にせよ、日本語で直接読むことができるわれわれにとっても重要な出来事である。

しかし作品に収録された物語のなかには、遠い時代の事物、言葉遊びの妙技

9 三木 他, 1990: 33-34.

10 Mills, 1970: 156.

11 現代語の「嘲笑う」とは異なり、古語の「あざわらふ」は「呵呵と大笑いする」の意で使用されることが多い。

12 Sieffert, 1986.

を主題に据えているものも多分に交じる。日本の文化に造詣が深く日本語の特性に通じた読者であれば難なく理解できるかもしれないが、英語訳やフランス語訳の読者はそうでない者がほとんどだと思われる。読みづらい話にはさほど興味を惹かれなかったのではないだろうか。言葉遊び等の難解な要素を含む説話をも分かつ訳出しなければならない全文訳の意義と、読まれるためにあえて抄訳を選択することの是非を検討したい。

外国語への翻訳は、そのほとんどが対象言語の現代語で行なわれるため、母語の古典を読むときに感ずる古語と現代語のギャップは問題とはならない。スペイン語圏の読者が『宇治拾遺物語』を読むにあたり避けられないのは、地理的・文化的差異に因を求めうる予備知識の不足である。スペイン語圏の人々に日本の、とりわけ800年以上もさかのぼる時代の暮らしぶりや人々の心情を紹介する際、多大なる注釈がほどこされなければならない可能性が生じる。古典文学の研究に励む者はつまびらかな解説を望むであろう。その一方で、専門的な領域にまで踏み込むのはためらわれるといった読者の目には、膨大な注釈は学をてらったものに映ると思われる。

現在取り組んでいる翻訳が、日本の文学や文化を専門とする学識者を対象とし、研究結果を大いに盛り込んだ大部に仕上がるようにとの立場をとらない。机に向かい威儀を正し厳かにひもとく作品ではなく、気楽に手に取り楽しめるものになればよい。

ここで『宇治拾遺物語』第1話について考えよう。「道命阿闍梨和泉式部の許に於て読経し五条の道祖神聴聞の事」は訳されるべきか。本話の筋書は次の通りである。

道命という経を巧みに読む僧が和泉式部のもとに通い寝床を共にした。夜中に目を覚ました道命は、(別の部屋で)心静かに経を読んだが、暁ごろふと人の気配を感じた。五条の道祖神と名乗る相手は「今晚、あなたの読経に立ち会えてよかった」と言う。「経を読むのはいつものことだが」と不審がる道命に相手が言うことには、「平常、あなたの身が清い時には(仏法の守護神である)梵天、帝釈天をはじめとする格の高い方々が経を聴きに列席されます。今晚、あなたは行水もなさらずお読みになるので、梵天、帝釈天はいらっしゃいません。このたび、(わたくしめのような者が)経を聴く機会を得られたことを忘れがたく思います」。

本話のもつ面白みが果たしてスペイン語圏の人々に通ずるであろうか。話の筋書きを変えてはならないので、残る手段は適切な訳語を選びぬき読者の理解を促すことであるが、きてれつな形容詞を用いるなどして話の滑稽さをむりやり演出するようなことは避けるべきだろう。また、説明を欠かしてはならない

固有名詞が多く、そこに付される注釈の量が多くなればなるほど読者の興味をそいでしまうのではなかろうかという懸念が生じる。位に差があるというだけで、神である道祖神が梵天・帝釈天と同じ日時、場所で経を聴けないのは何故だという疑問を呈する者もあるかもしれない。道祖神と仏教の守護神の扱いの差、当時の文化的背景をも説明しなければならず、さらに注釈が膨らむ。全文訳という訳出形態を採用した場合、おそらく物語集の冒頭に置かれた話、すなわち第1話をはじめに目を通されるであろう。そこに膨大な脚注が記されておれば、気軽に読み始めた者が放棄しかねない。物語世界に没入しやすい作品を目指すのであれば、第1話を省くのがむしろ妥当ではないかと思われる<sup>13</sup>。

なお、日本で出版された『宇治拾遺物語』には、作品そのものや収録された話の性質に触れた序文<sup>14</sup>なるものが存在するが、後世の増補だと思われるため、訳出する必要はないだろう<sup>15</sup>。

『宇治拾遺物語』は内裏での一場面、あるいは御所近辺で起こった事件等、貴族階級に属する者のみ見聞できた話を扱うと同時に、宮廷の深部とは関係を持ちえない人々によって語り継がれたであろう逸話をも収録している<sup>16</sup>。海を越えた異国での出来事にまで取材することもある<sup>17</sup>。『今昔物語集』も同様の姿勢をとるが、『宇治拾遺物語』は表現がより簡素である。実際、このふたつの説話集に共通する物語が頻繁に見られ、ほぼ同内容の両文をそれぞれ比較すると、読みやすさという点ではさほど変わらないはずだが、後者はより砕けた表現を用いている感がある<sup>18</sup>。

そもそも『宇治拾遺物語』は平易な言い回しが多く、日本の古典文学のなかでも読みやすい作品である。現代の日本人が古典文学の世界に親しむ端緒にもなりうるだろう。スペイン語圏の人々に向け紹介する際も同じことが望まれる。全文訳にこだわらず、訳出する話を厳選し、スペイン語の難解語句を極力省き、注釈を最小限にとどめた読みやすい文章に仕上げようとするのが、この

13 仮に第1話を省けば、抄訳への収録に値すると思われる第2話の冒頭語「これも今は昔」の訳出に課題が生じる。ほかの話にも頻繁に見られるこの冒頭語の訳語として目下、*Otra vez, hace ya mucho tiempo*を採用しているが、前話の存在なくしては*otra vez*の意味が判然としない。「今は昔 (*Hace ya mucho tiempo*)」で始めなければならず、原文にわずかばかり手を加える必要がある。

14 大島, 1985: 19-20、三木 他, 1990: 5-6、小林 他, 1996: 23-24.

15 Sieffert (1986) には含まれる一方、Mills (1970) にはない。

16 第57話「石橋の下の蛇の事」、第89話「信濃国筑摩の湯に観音沐浴の事」、第113話「博打の子聳入の事」等。

17 第92話「五色の鹿の事」、第170話「慈覚大師、額額城に入り給ふ事」、第197話「盗跖孔子と問答の事」等。

18 「利人、暑預粥の事」と『今昔物語集』巻第26第17を比較・参照されたい。ただし、文章の良し悪しの判断は個人の主観が大いに伴う。『宇治拾遺物語』に収録されたほうが読みやすく優れていると主張するわけではないことを断っておく。



作品の翻訳を試みるにあたり適当だと思われる。

そのほか、全文訳の必要性に一石を投ずるための根拠とするところは多々あるが、和歌を含む話を例にとって説明すると分かりやすいであろう。

限られた文字数に多様な心情を入れ込み、掛詞・縁語を駆使し、時には故事をも絡ませる高度な手法が用いられた和歌を諸外国語に訳出することは極めて難しい。ややもすると脚注に長々と説明を加えなければならない。

一例として、第43話「藤六の事」の全文と、下線を引いた箇所の英訳を次に示す。

今は昔、藤六といふ歌よみありけり。げすの家にいりて、人もなかりける折を見つけて、入にけり。鍋に煮ける物を、すくひ食ひける程に、家あるじの女、水をくみて、大路のかたより来て見れば、かくすくひ食へば、「いかにかく、人もなき所に、いかで、かくはする物をばまゐるぞ。あなうたてや。藤六にこそいましけれ。さらば、歌よみ給へ」といひければ、むかしより阿弥陀仏のちかひにて煮ゆる物をばすくふとぞしるとこそよみたりけれ。<sup>19</sup>

For ages past, I know, / Has the Buddha Amida / By his gracious vow / Brought the gift of salvation / To those who burn in Hell.<sup>20</sup>

英訳は「むかしより」と「しる」を初句にまとめる工夫をほどこしており、たいへん興味深い。しかしながら、「誓い（ちかひ）」と「匙（かひ）」、「救ふ」と「掬ふ」の掛詞の説明に脚注<sup>21</sup>を付さざるを得ない<sup>22</sup>。和歌はさることながら、藤六の当意即妙の切り返しもまた本話の面白みのひとつである。にもかかわらず、注釈を読んでようやく意味を理解しうるのでは間が悪い。

『宇治拾遺物語』に語られる洒落は比較的平易だと言えるが、それでもなお、スペイン語圏の読者が日本の言葉遊びを鑑賞するには日本語への高次の理解が必須であるし、仮に理解が及んだとしても洒落を楽しめるか否かとはまた別問題であろう。

もちろん、現代日本に生まれ育った者が、上記の洒落を即座に理解できず、注釈を読まなければならないこともある。しかし、日本語に触れる期間がスベ

19 三木 他, 1990: 89.

20 Mills, 1970: 203.

21 Mills, 1970: 203 を参照のこと。

22 なお、「かひ」という掛詞に関して付言するならば、『竹取物語』の「燕の子安貝」の条における「貝」と「効（かひ＝甲斐）」の洒落が絡む。

イン語圏の読者に比して長いことは言うまでもない。洒落の理解とそれに伴う鑑賞の度合いという点では、日本語を母語とする者とスペイン語圏の読者との間には埋めがたい懸隔があることは否定できないと思われる。はたして「藤六の事」は訳出されるべきか。この話に限らず、言葉遊びに主眼が置かれる話については、諸外国語に翻訳するよりも日本語で読むことを勧めるのが正当ではなかろうか。

言葉遊びを含まない和歌を扱う話の訳出についても一考しなければならない。『宇治拾遺物語』には、技法が駆使され詠まれる和歌もあれば、より簡潔に心情をうたったものもある。

くやしくぞ後にあはんと契ける今日を限りといはまし物を<sup>23</sup>

(後日お会いしましょうと約束してしまったことが悔やまれます。[命の尽きることが分かっていたなら、あの時、] 今日でお別れですと申し上げたものですのに……)

第146話「季直少将歌の事」に詠まれる和歌であるが、掛詞も縁語もなく、仮定法を用いれば容易に訳せよう。しかしここで問題にしたいのは、話の全文に注意を払った場合、訳出に値するか否かということだ。季直少将という人がいた、病が小康状態になったとき内裏に参上し、快復すればまた仕事に戻る旨を奏上してくださいと(公忠弁という人に)伝言し、後日、上記の歌を詠み、その日のうちに亡くなった。有り体に言ってしまうとただそれだけのことなのである。物語集に収録すべき話だと編者<sup>24</sup>が判断したことをかんがみると、「季直」なる人物および彼の伝言をことづかる「公忠弁」なる人物はともに、『宇治拾遺物語』が上梓された頃には貴族階級のあいだでしばしば語られる人々であったのだろう。当時においては物語集に収録すべき一話とみなせたらうが、現代のスペイン語圏の読者にとってはどうであるか。翻訳し紹介すべき話というにはいささかの心もとなさを抱かざるを得ない。

しかしながら、和歌が話柄となる物語をおしなべて除外すべきでない。第93話「播磨守為家の侍佐多の事」において Mills は、日本語の助詞が問題となる和歌を訳出し、助詞の扱いをうんぬんするある登場人物の発言の訳に工夫をほどこした。詠まれた和歌と人物のせりふを示そう。

23 三木 他, 1990: 303.

24 『源氏物語』『徒然草』等は内容のおおよそを作者自身が案出しているが、『宇治拾遺物語』は過去の説話集に取材したとされる話を多く含み、趣を異にする。雑多な説話をまとめあげ、ひとつの作品として『宇治拾遺物語』を完成させた人物を、本稿においては「作者 (autor)」ではなく「編者 (compilador)」と呼ぶ。ただし、参考文献では便宜上「作者不明」とした。



われが身は竹の林にあらねどもさたがころもをぬぎかくる哉 (...)「目つぶれたる女人かな。ほころび縫ひにやりたれば、ほころびのたえたる所をば見だにえ見つけずして、『さたの』とこそいふべきに、かけまくもかしこき守殿 (かうのとの) だにも、まだこそ、こゝらの年月比 (ごろ)、まだ、しか召さね。なぞ、わ女め、『さたが』といふべき事か。この女人に物ならばさん」といひて、 (...) <sup>25</sup>

Though I myself / Am no grove of bamboo, / Yet does Sata / Take off his robe / And hang it up on me. (...) ‘Haven’t you got eyes in your head, woman?’ he roared. ‘I give you something with seams to be sewn up and you can’t even see where they’re coming apart! And what do you mean by saying “Sata’s” instead of “Mr Sata’s?” Even our respected Lord the Governor has never done that, in all these years. I’ll teach you!’ <sup>26</sup>

助詞の「の」と「が」の差異、しかも古語が扱われていた時代の意味の差異について脚注<sup>27</sup>を付しているものの、Sata’sとMr Sata’sの使い分けで翻訳作品としては十分といえる解決がなされている。それ以上の解説は煩雑になるため不要とさえ言える。スペイン語に置き換える際も de Sataとdel señor Sataで対応できるであろう<sup>28</sup>。

この一編の筋をつかむためには和歌の理解が重要であるが、面白味はそこだけにとどまらない。「佐多」の行状が滑稽なものであることもまた、本話の展開・結末に効果を与えている。「佐多」に恫喝された「女房<sup>29</sup>」を「いとほしがり、やさしが<sup>30</sup>」る周りの態度も注目に値する。華々しい身分に属さなくとも気の利いたすぐれた和歌を詠めば高く評価される様子がうかがえる<sup>31</sup>。

注釈を可能な限り減らそうと試みるかたわら、付すほうがよいと思われる箇所も見受けられる。古典文学に限らず、近・現代小説においても同様の問題に直面する。芥川龍之介「竜」の結末部を一例として次に示す。

25 三木 他, 1990: 179.

26 Mills, 1970: 273-274.

27 Mills, 1970: 274 を参照のこと。

28 「竹の林」と「さたがころもをぬぎかくる」に関して、法隆寺所蔵「玉虫厨子」の「捨身飼虎図」に描かれた薩埵太子（さったたいし）への言及は必要だろう。

29 通常「女房」は貴族の家に仕える女のことをいうが、本話における「女房」は、人に騙され京を離れ、さまよっていた。その後、不憫に思った郡司に拾われ針仕事をしていた。けっして身分が高いわけではない。

30 三木 他, 1990: 180.

31 第40話「樵夫歌の事」の「木こり」、第147話「樵夫小童、隠題の歌読む事」の「木こる童」等、身分の低い登場人物の和歌も物語集に採られている。

¿Eh, un relato sobre un monje de larga nariz llamado Ike no O no Zenchinaigu? Después de oír sobre Hanakura todavía será más interesante. Comienza en seguida...<sup>32</sup>

下線部は「池の尾の禅智内供」のことであるが、この人物が主人公となる「鼻」が Watkins 訳には収録されておらず、固有名詞が妙に際立った印象を与える<sup>33</sup>。解決の一案として、下線部を削除する方法が考えられるが、脚注にて言及するという手段を採ってもかまわないだろう。簡単な説明であれば注釈は膨大にならない。「鼻」を重要作品と位置づけるのであれば、むしろ書き記すほうがよいと思われる。

### 3. ローマ字表記の是非と訳語の選択

#### 3.1. 日本独自の文物について

日本文学の翻訳に長年携わる Rubio は日本の文物のローマ字表記について次のように述べている。

日本文学に登場する下駄、茶碗、虫、畳、袴、念仏、鳥居などの日本文化用語 (...) を日本語のままローマ字表記を用いて訳すならば、日本文化に精通していないスペイン語圏の読者は、混乱するだけでなく、(...) 日本文化に対する誤謬を犯すことになるかもしれない。<sup>34</sup>

日本から遠く隔たった地域で生活するスペイン語圏の読者が「日本文化に精通していない」時期を経るのは避けられず、「日本文化に対する誤謬」は頻繁に起こりうるだろう。しかし、果たしてローマ字表記に端を発することなのであろうか。芥川龍之介「羅生門」を例に挙げよう。

羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。<sup>35</sup>

Puesto que la Rashōmon está situada en la Avenida Sujaku, lo lógico era que

32 Watkins, 1995: 31.

33 Kozer (1987) には「鼻」が収録されている。ちなみに、Kozer 訳、Watkins 訳ともに「竜」の主人公「恵印」の名を訳出しないよう工夫されている。

34 坂東 他, 2010: 365.

35 芥川, 1915; 2005: 8.

alguien más, con sombrero de enea o tocado como hidalgo, anduviera por ahí esperando a que la tempestad que se había desatado amainara. No se veía, sin embargo, un alma; sólo aquel hombre.<sup>36</sup>

Estando la Puerta de Rashomon en la gran Avenida de Suzaku se podía esperar que, además de este hombre, hubiera allí algunas mujeres con anchos sombreros de junco y hombres con gorros de pico, típico de la ciudad, esperando que cesase la lluvia. Pero no hay nadie más que él.<sup>37</sup>

Kozer 訳では「市女笠」を *sombreros de enea* とするが、この訳語で表されるものはカンカン帽に近く、壺装束姿を思い描くことは難しい。また「揉烏帽子」に *tocado como hidalgo* の訳語をあてるが、本作品の舞台である 12 世紀末頃のかぶり物 (*tocado*) をスペイン語圏の読者は想像できないだろう。

Gutiérrez et al. 訳では「市女笠」の鍔広の形状を *ancho* で表現するが、やはり壺装束姿にまでは想像が及ばないと思われる。また *gorro de pico* から「揉烏帽子」の実物に至らないのも同様だろう。

同箇所においてローマ字表記を採った例を参照しよう。

Situado Rashomon en la Avenida Sujaku, era de suponer que algunas personas, como ciertos *ichimegasa* o *momieboshi*, podrían guarecerse allí; pero al parecer, no había nadie fuera del sirviente.<sup>38</sup>

脚注にはそれぞれ次のように記されている。

Sombrero antiguo para dama, de paja o tela lacada, según la clase social a que pertenecía quien lo usaba.<sup>39</sup>

Antiguo gorro que usaron los nobles y los samurai.<sup>40</sup>

ローマ字表記と脚注でスペイン語圏の読者に具体像を提供できるとは言えないが、少なくとも注意喚起にはなりうるだろう。「市女笠」や「揉烏帽子」は

36 Kozer, 1986: 19.

37 Gutiérrez et al., 1995: 55-57.

38 Sakai, 1954: 38.

39 *Ibid.*

40 *Ibid.*

往時の日本で一般に見られ、平安末期が舞台となる「羅生門」の物語世界に登場する人々の服装を正しく思い描こうと試みるに、これらふたつの注釈は必要である。前節では注釈を最小限にとどめるよう述べたが、欠いてはならない情報を不要として切り捨ててはならない。時としてローマ字表記と脚注が用いられなければならないだろう。

『宇治拾遺物語』のなかから、ローマ字表記を採らず日本語の意味に相当する訳語をあてようと試みた例を紹介する。第169話「念仏僧、魔往生の事」の結語「智恵なき聖は、かく天狗にあざむかれけるなり<sup>41</sup>」に注意されたい。英訳を参照したところ次のようにあった。

This foolish priest, as you see, had been tricked by goblins.<sup>42</sup>

西洋世界の goblin という語によって思い描かれる生物のイメージは、わが国の「天狗」とは大きく隔たり、むしろ「餓鬼」に近いと言える。また、goblins に付された注釈は、Tengu, winged creatures with long noses who are enemies of Buddhism<sup>43</sup> とされている。

しかし「天狗草子<sup>44</sup>」や「是害坊絵巻<sup>45</sup>」等に見られる「天狗」の姿形は、現代一般に描かれるごとく鼻が長く赤ら顔ではない。本話では僧の素性に触れられず、事件の起こったのは「昔」とのみ記される<sup>46</sup>が、『宇治拾遺物語』成立ごろもこれらの絵巻と同様の姿をしていたはずであり、with long noses は訂正されねばならない。読者に正しいイメージを提供しようと試みる際、ローマ字表記と正確な注釈が効果的ではないだろうか。

日本の文物について可能であればローマ字で記すことを提案するものの、読者に余分な注意を払わせることになるおそれも一方ではある。森鷗外「山椒大夫」を例に挙げよう。

男はこんな事を言う。「わしは山岡大夫という船乗りじゃ。(…)わしが所ではさしたる餐応(もてなし)はせぬが、芋粥でも進ぜましよう。どうぞ遠慮せずに来て下されい。」<sup>47</sup>

41 三木 他, 1990: 337.

42 Mills, 1970: 390.

43 *Ibid.*

44 小松, 1993。とりわけ三井寺巻 (pp.50-73) を参照されたい。

45 ウェブサイト「慶應義塾大学『世界のデジタル奈良絵本』データベース」を参照されたい。

46 本話と同内容の『今昔物語集』巻第20「伊吹山三修禪師得天宮迎語 第十二」では9世紀の出来事としている。

47 森, 1915; 1992: 254.

— Soy un marinero llamado el capataz Yamaoka — se presentó el hombre — (...) En mi casa no hay grandes manjares, pero puedo ofrecerles *imogayu*. Por favor, vengan sin ninguna preocupación.<sup>48</sup>

当話において「芋粥」は数度しか見受けられず、また物語内で鍵の役割を果たす語とは言えない。にもかかわらず、ローマ字で記したうえ注釈を配すると、読者の意識が多少なりともそこに向かいかねない。訳者自身の付した脚注のとおり、*Sopa de ñame*<sup>49</sup>を訳語とするのが妥当ではないかと思われる。

話題をふたたび『宇治拾遺物語』に転じよう。飲食物が重要な役割を果たす話は数編収録されており<sup>50</sup>、とりわけ第18話「利人、暑預粥の事」では、題が示すとおり「芋粥」が大きく関係する。しかし、本話は「芋粥」の馳走の情景を通し、地方に居住する有力者の豪奢ぶりをこそ際立たせようとしたのではないかと思われる節があり、この食物を指す言葉としてローマ字表記を採る必要性に乏しい。仮に採用した場合、むしろ浮いた印象を与えかねない。相当するスペイン語の訳語が冗長であれば一考されねばならないが、Gallego 訳に示されるごとく、簡潔に表現できるのである。芥川龍之介「芋粥」の Watkins 訳では、同様にわずか3語の *ñame en dulce*<sup>51</sup> が用いられる。ローマ字表記でなくとも何らの支障を来さないことが分かる。

また、ローマ字表記によって一般に思い描かれるものと実像とが乖離するおそれも時としてあるのではないだろうか。芥川龍之介「芋粥」を例に挙げよう。

その頃、摂政藤原基経に仕えている侍の中に、某という五位があった。<sup>52</sup>

Por aquellos días vivió en Kyōto un cierto samurai que estaba al servicio de Mototsune, Regente de los Fujiwara.<sup>53</sup>

En aquellos días, entre los funcionarios al servicio del regente Mototsune Fujiwara, se encontraba uno cuyo nombre desconozco pero que ejercía como

48 Gallego Andrada, 2000: 38.

49 *Ibid.*

50 第79話「或る僧、人の許にて氷魚盗み食ひたる事」は同音異義語（「氷魚」と「雹」）を用いた言葉遊びまで関わる。

51 Watkins, 1995: 84.

52 芥川, 1916; 2005: 32.

53 Kozer, 1987: 27.

*goi*, denominación que indica un puesto de funcionario de quinta categoría.<sup>54</sup>

物語の舞台は平安前期である。「さぶらふ」から転じた「侍」は、この時代においては主君のそばに控え邸宅の雑務・警護を行なった者を指す。しかし *samurai* という語に注釈が付されていなければ、スペイン語圏で一般に惹起されるのは中世以降の武士のイメージであろう。Watkins 訳の *funcionario* が適語と判断される。

日本の文物をどう表記すべきかという問題に対し、Rubio は「個々の文学作品、個別の用語によって異なり、万全の策は存在しない<sup>55</sup>」と述べるが、この主張はもっともだと思われる。ローマ字表記を採るか否か、翻訳者側の臨機応変の裁量が求められるであろう。

表記・脚注のみで伝えようとすればおのずと限界は訪れよう。では具体的かつ正しいイメージを提示するにはどのような手段が有効かという問いには、色刷りの口絵の使用をもって解決を図ればよいのではなかろうか。

『宇治拾遺物語』に収められた説話群の情景は、浮世絵等で外国に広まった近世日本のものとはほど遠い。物語集で主に舞台となるのは平安朝の日本であり、近世を念頭に置いたままでは不都合が生じる。宮廷に出入りする貴族や女房の服飾図や寝殿造の邸宅の復元図<sup>56</sup>、当時の風俗・祭礼を描いた絵巻等の資料を巻頭に置くことで、読者はより鮮明に物語世界を思い描くことができると思われる。

### 3.2. 固有名詞の表記と同音異義語の訳出

続いて、ローマ字表記を採用するほかない人名について考えたい。島崎藤村『破戒』の冒頭を例に挙げよう。

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に転宿（やどがえ）を思い立って、借りることにした部屋というのは、その蔵裏（くり）つづきにある二階の角のところ。<sup>57</sup>

El templo de Rengeji aceptaba huéspedes. Cuando Ushimatsu Segawa tomó, de repente, la decisión de cambiar de alojamiento, alquiló una habitación en el

54 Watkins, 1995: 77.

55 坂東, 2010: 365.

56 ウェブサイト「風俗博物館～よみがえる源氏物語の世界～」が大いに参考になるであろう。

57 島崎, 1954; 2005: 5.



primer piso, situada en una esquina sobre las dependencias privadas del monje.<sup>58</sup>

日本人名がアルファベットで記載されるにあたり欧米の方式に従い名・姓の順になる現代ではさほど問題とはならないが、上記の例に示した時代と『宇治拾遺物語』のそれには大きな隔りがあることに注意が払われねばならない。平安朝は当然のことながら事情が異なり、姓と名の間に「の」を入れるのが通例である。「の」を考慮すれば姓・名の順を変えることはできない。『宇治拾遺物語』では著名な人物の姓が省かれたり人名でなく役職名で示されたりすることが多く<sup>59</sup>、このような場合「の」の存在は無視できようが、姓と名の両方が記されることもままある<sup>60</sup>。姓と名の順序に関して統一を図るため、原則的に「の」を入れ、姓・名の順で記するのが適当だと考えられる。

ローマ字の読み方と人名表記に関して、次の例が参考になるであろう。

Nota: Para la transcripción de los nombres japoneses se ha utilizado el sistema Hepburn, cuya lectura coincide con la pronunciación nipona y española. No obstante, la “h” la “j”, la “w” y la “z” tendrán un sonido similar al del inglés, mientras que la “g” se pronunciará como la “g” suave en castellano. En cuanto al orden, se ha seguido el criterio occidental, es decir, primero el nombre y después el apellido.<sup>61</sup>

下線で示した姓と名の順に関する記述は本稿筆者の翻訳対象である作品では適用できないが、はじめにこういった断り書きを付すのは読み手への配慮になると考えられる。

ローマ字表記の是非から少しく話題を転ずる。海外から多くの概念が流入しその訳語の案出に苦心し、文章形態に大幅な変化がもたらされた過程を経てのち世に出た近・現代の小説に比して、古典作品は当然のことながら語彙数でまさることはない。墨書で書き損じの修正がきかない、紙の量が限られている等の事情もいくらか関係するだろうが、『宇治拾遺物語』には同語や同音異義語、

58 Watkins, 1997: 11.

59 第184話「御堂関白の御犬、晴明等、奇特の事」では安倍晴明が「晴明」、藤原道長が「御堂関白（御堂関白殿、御堂殿）」と記される。

60 第49話に小野篁（おののたかむら）、第122話に小槻当平（をつきのまさひら）等の例が見られる。また、『竹取物語』のスペイン語訳（Takagi, 2004: 193-194）では Sanuki no Miyatsuko, Inbe no Akita, Nayotake no Kaguyahime 等、通称に「の」が用いられる例が見られる。

61 Gallego, 2000: 4.

さらには同字異義語の反復がしばしば見受けられる。日本語以上にスペイン語は同単語・同表現の使用を避ける傾向にあるため、翻訳するにあたり類義語が採られることとなるだろう。しかし物語集に見られる繰り返しには、これといった意図を感じられないものと、単純に看過しえないものと、ふたつの種類があるのではと思われる。

後者にはどのような例があるか。第2節にて扱った「播磨守為家の侍佐多の事」をふたたび話題にしよう。為家に仕える侍のあだ名「佐多」と、同音異義語で処置の意の「沙汰」（またはサ変動詞化した「沙汰す」）が意図的に多用されている節がある。該当箇所を示そう。

今は昔、播磨守為家といふ人あり。それが内、させる事もなき侍あり。字（あざな）さたとなんいひけるを、例の名をば呼ばずして、主も傍輩も、たゞ、「さた」とのみ呼びける。（…）なすべき物の沙汰などいひ沙汰して、四五日ばかりありてのぼりぬ。<sup>62</sup>

さて、二三日斗（ばかり）ありて、為家に、「沙汰すべき事どものさぶらひしを、沙汰しさして参りて候し也。いとま給りてまからん」といひければ、「事を沙汰しさしては、何せんを上りけるぞ。とく行けかし」といひければ、喜て下りけり。<sup>63</sup>

「佐多」は固有名詞なので Sata とするほかない。一方で、「沙汰」には *hacer, tratar, acabar* 等、Sata と音の繋がりを見出せない語を用いざるをえない。「主も傍輩も、たゞ、『さた』とのみ呼びける」も Sata の反復を避け、たとえば *llamarlo por el apodo* としなければならぬ。音の繰り返しのより生まれる本話の妙味がそがれることは免れないだろう<sup>64</sup>。

次に同字異義語の例として第193話「相応和尚都卒天に上る事 付染殿の後祈り奉る事」を挙げるが、英訳も参照されたい。

其滝にて、不動尊に申給はく、「我を負て、都卒の内院、弥勒菩薩の御許に率て行給へ」と、あながちに申ければ、「極（きわめ）てかたき事なれど、しみて申事なれば、率てゆくべし。其尻を洗へ」と仰ければ、滝の尻

62 三木 他, 1990: 177.

63 三木 他, 1990: 178.

64 繰り返しの箇所として挙げた2例はいずれも和歌の前に配されており、和歌に込められた「薩埵太子（さったたいし）」の洒落への布石でもあるか。

にて、水浴み、尻よく洗て、明王の頸に乗て、都卒天に上り給ふ。<sup>65</sup>

By this waterfall, he appealed insistently to the god Fudō: ‘Take me on your back to the seat of the Bodhisattva Miroku in the Inner Palace of the Tusita Heaven.’ ‘That is very difficult,’ the god replied, ‘but as you are so insistent, I will take you. You must wash your buttocks.’ Sōō bathed beneath the waterfall and thoroughly washed his buttocks, then sat on the god’s head as he ascended to the Tusita Heaven.<sup>66</sup>

英訳のふたつめの buttocks は他の語で言い換え可能だと思われるが、ことさ  
ら同じ語が使用された感があり、日本語の反復を考慮しての訳出であろうか。  
また、英語で beneath the waterfall の訳があてられた箇所は「滝の後部」と解釈  
し、スペイン語ではたとえば al trasero de la cascada というふうに、trasero を用  
いれば2種の「尻」を訳せるだろう。

#### 4. 結び

以上、『宇治拾遺物語』を翻訳するに避けては通れない問題点をいくつか指  
摘した。スペイン語に訳された古典はもちろんのことながら、近・現代の作品  
に手掛かりを見出せる場合も少なからずあることが分かった。本稿における考  
察から導き出された方策および以後の方針をいま一度確認したい。

第2節で述べたように、スペイン語訳の読者に想定しているのは日本文化を  
究めんとする学識者でなく、日本に大きな、あるいは少しばかりの興味を抱  
き、かつ気楽に構え作品を楽しもうとする人々である。膨大な注釈を提示し、  
説話集の文学的価値や和歌の手法等への深甚なる理解を促すよう強いるのは避  
けたほうがよいであろう。しかし全文訳を試みるならば自然、きわめて多くの  
注釈を要する物語も訳されなければならない。

説話集に収められた雑多な物語群は、人口に膾炙していたからこそ書き留め  
るべき事柄と判断、収集された。言い換えれば、ひとつの作品にまとめられる  
以前の段階で個々の話はすでに広く語られる価値を有していたということであ  
る。また説話集全般に言えることだが、各話の結びつきはさほど意識される必  
要がない。前後に配される話の内容を知らずとも、ただその一編のみでじゅう  
ぶん鑑賞に堪えるものとなっている。説話集の有するこれらの性質ゆえ、全文  
を訳す意義は薄らぐ。訳出する話の選定には大きな責任を伴うが、手に取って

65 三木 他, 1990: 386.

66 Mills, 1970: 429.

読まれるものを目指すには、少なくとも『宇治拾遺物語』においては抄訳の形態を採るのが妥当であろう。

日本独自の文物にあてる訳語に関して言えば、森鷗外「山椒大夫」に用いられた「芋粥」の例で示したが、おおよそ的確に言い表せる語があるのならばこれを使用するのが望ましいと思われる。一方で、芥川龍之介「羅生門」における「市女笠」と「揉烏帽子」のように、物語の情景を想像するのに必須となる要素であると判断したならば、ローマ字表記の採用を前向きに検討しなければならない。スペイン語で訳したうえ何らの注釈も加えられなければ、日本の文物のイメージを正しく描けず、「日本文化に対する誤謬<sup>67</sup>」を正す機会をも得られないのではないのか。

同国に生まれ育った者どうしであれ、ある文章を読む際まったく同じような情景を思い描くことはけっしてない。しかし共通の読書経験あるいは学校教育を通じ、物語世界へと入り込む糸口を共有しており、各人が思い浮かべる風景にはなほだ大きなずれが生じることは頻繁には起こりえない。ただし、スペイン語圏の人々が日本の古典作品を読む場合はそうもいかないだろう。何らかの視覚資料の提示が強く求められる。

インターネットの普及により、日本に関する視覚資料を比較的容易に閲覧できるようになった。海外渡航の活発化に伴い、日本文化へじかに接する機会が格段に増えた。世の趨勢は刻々と変化するが、翻訳書はさほど変わらない。前節で本に色刷りの口絵を掲載するよう提案したが、翻訳された文学作品を手に取り人々への配慮を従来とは違った形で示すことができるのではと考え、述べたまでである。時代・文化の大きく隔たった物語世界を扱うのであれば、視覚資料を豊富にしたほうが理解しやすいと思われる。ただほんの少し、翻訳書のあり方に変化を与えてもよいのではないだろうか。

『宇治拾遺物語』に収録された説話の多くは平安朝の日本が舞台である。にもかかわらず、「日本」と聞いた際に思い浮かべられる対象物は近世以降のものが多いのではないだろうか。江戸時代のイメージが先行し、当物語集を読むにあたって齟齬をきたすことが考えられる。スペイン語圏の読者が『宇治拾遺物語』に描かれる事物を正確に捉えられない可能性がある。このような理由からも口絵の掲載を推したいのである。

ふたたびローマ字表記に話を戻そう。日本独自の文物であれば何でもかでもこの表記法でよいわけではもちろんない。匙加減にはそのたびごとの判断が求められるだろう。たとえば旅行ガイドブックでは *minshuku* (民宿)、*onsen* (温泉)、*tokkyū* (特急) というように、宿泊施設や公共交通等につわる語句は、

67 坂東他, 2010: 365.

日本で発せられる音に従いローマ字をあてることが多い。この種の本は現地で  
の利便性を考慮に入れローマ字表記を採っているのであり、文学作品とは性質  
の異なる読み物である。しかし、日本固有の文物の訳出や視覚資料の提示にど  
のような工夫をほどこすか、一考の機会を供するものであることは疑いない。  
ガイドブックに限らずさまざまな分野の書物を今後も参考にしてゆくこととす  
る。

人物を示す固有名詞の扱いに関しては、姓と名の間に「の」を入れざるを得  
ない状況も時としてあることをかんがみるに、姓・名の順で統一を図るのがよ  
いだろう。日本独自の文物を可能であればローマ字で記すというのは、日本語  
のもともとの音を重視することでもあり、人名表記にも同様の姿勢でもって臨  
むべきだと考えられる。

第2節および第3節にて和歌の手法や同音異義語の反復について述べたが、  
ある言語の言葉遊びを系統の異なる他言語で表現するのは極めて難しい。日本  
語以外で表すには、注釈がなければおのずと限界が訪れる。しかしながら洒落  
への理解を促すため逐一解説を加えることに拘泥すると、脚注に相当の紙幅を  
要する。スペイン語に訳されたものを読むのは主としてスペイン語圏の人々だ  
ということをおもんばかれば、日本語についての細かな解説を控えなければなら  
ないこともあるだろう。日本人が日本語の文章を読む際に必要とされる理解  
の度合にまで訳書を手取る者を引き上げようとする企ては、筆者の目標とす  
る「専門書でない本」にはそぐわない。脚注は少ないほうがよいだろう。抄訳  
に収める話を選定すると同時に、注釈の選り分けにも神経を尖らせなければなら  
ない。

さいわいにも、注釈を用いず日本語原文の意図を反映できるのではないかと  
思われる箇所もないではない。前節で第193話の同字異義語を例に挙げ、解決  
への一策を示したのがそれである。物語集内に散見されるこれと同種の趣向も  
も何らかの形で表現できればよいだろう。

また前節に挙げた同語・同音反復の例から、物語集の編者は作品が音読され  
ること、つまり目よりも耳で読まれることを意識していたのではないかとさえ  
想像できる。音の繰り返しは、原始的ではあるが、耳で話を追う者の注意を喚  
起しやすく有効な手段となりうるだろう。このような推測は多分に主観的であ  
るため編者の思惑を断定することはできない。加えて編者は説話を書き記す態  
度にほぼ終始し、自説の陳述をなるべく避けている。『宇治拾遺物語』にど  
のような意図が込められたか、また物語集初版が上梓された当時の人々の反応も  
現代のわれわれには分からない。翻訳に際して不分明な点は多々あるものの、  
日本語原文の音声の妙味を引き出せるよう訳語にも何らかの工夫が望まれるで



あろう。

本稿の執筆に際し、これまでに出版された訳文の良き箇所と少しく不備を感じられる部分をいくつか取り上げたが、訳者の甲乙を論ずることが目的でない旨をここに記す。英語圏やスペイン語圏とは文化が大きく異なる日本の近・現代小説や古典作品の翻訳を試み作品を完成させた功績は、途上で行われた資料収集や調査活動を含め大いに評価せられるものである。同時に、日本語を母語とし生まれ育った者が日本の文化を深く理解し、正しい伝達をしなければならないことをしかと自覚すべきだとの思いをいよいよ深くする。

『宇治拾遺物語』の抄訳を目指すにあたり、訳出に値すると思われる話を選定し、さまざまな翻訳作品を参考にしつつ取り組むことを目下の課題とする。

### 参考文献

- 坂東省次・川成洋（2010）『日本・スペイン交流史』、東京：れんが書房新社。  
 金田一春彦・小久保崇明（1998）『完訳用例古語辞典』、東京：学習研究社。  
 小林保治・増古和子（1996）『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』、東京：小学館。  
 小松茂美（1993）『続日本の絵巻 26 土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』、東京：中央公論社。  
 三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明・佐竹昭広（1990）『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語 古本説話集』、東京：岩波書店。  
 大島建彦（1985）『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』、東京：新潮社。  
 風俗博物館～よみがえる源氏物語の世界～  
<http://www.iz2.or.jp/top.html>（2013年9月17日閲覧）  
 慶應義塾大学「世界のデジタル奈良絵本」データベース  
<http://dbs.humi.keio.ac.jp/naraehon/>（2013年9月17日閲覧）

### 翻訳作品

- 芥川龍之介（1915; 2005）「羅生門」、『羅生門・鼻』所収、東京：新潮社。  
 Sakai Kazuya 訳（1954）“Rashomon”, *Rashomon* 所収、Buenos Aires: L. Negri.  
 —— José Kozzer 訳（1987）“Rashōmon”, *Rashōmon y otros cuentos* 所収、Madrid: Miraguano.  
 —— Acacio Gutiérrez y Josefina Keiko Ezaki 訳（1995）“Rashomon”, *Cuentos de Ryunosuke Akutagawa* 所収、Tokyo: Sociedad hispánica del Japón.  
 ——（1916; 2005）「芋粥」、『羅生門・鼻』所収、東京：新潮社。José Kozzer 訳（1987）“Gachas de batata y arruruz”, *Rashōmon y otros cuentos* 所収、Ma-



drid: Miraguano.

- Montse Watkins 訳 (1995) “El deseo de Goi”, *El dragón y otros relatos* 所収、Tokyo: Gendaikikakushitsu.
- (1918; 2011) 「竜」『地獄変・偷盜』所収、東京：新潮社。José Kozér 訳 (1987) “El dragón”, *Rashōmon y otros cuentos* 所収、Madrid: Miraguano.
- Montse Watkins 訳 (1995) “El dragón”, *El dragón y otros relatos* 所収、Tokyo: Gendaikikakushitsu.
- 森鷗外 (1915; 1992) 「山椒大夫」、『ちくま日本文学全集 森鷗外』所収、東京：筑摩書房。Elena Gallego Andrada 訳 (2000) “El capataz Sansho”, *El barco del río Takase* 所収、Tokyo: Gendaikikakushitsu.
- 島崎藤村 (1954; 2005) 『破戒』、東京：新潮社。Montse Watkins 訳 (1997) *El precepto roto*, Tokyo: Gendaikikakushitsu.
- 作者不明『竹取物語』、Kayoko Takagi 訳 (2004) *El cuento del cortador de bambú*, Madrid: Cátedra.
- 作者不明『宇治拾遺物語』、D.E. Mills 訳 (1970) *A collection of tales from Uji*, Cambridge: Cambridge University Press.
- René Sieffert 訳 (1986) *Supplément aux contes d’Uji*, Paris: Publications Orientalistes de France.